

<令和4年度 研究発表会開催概要>

日 時：令和4年11月15日（火）

場 所：ホテルアウイーナ大阪

発表校：大阪市立弘済中学校分校（大阪府高槻市）

テーマ：自立に必要な力の育成をめざした修学旅行

**【重点を置いた活動】**

先を見据えて考えて動き、生徒たちが自らの手で修学旅行を作り上げる！

**（実施要領）**

- ・旅行先 兵庫県三木市・朝来市、鳥取県湯梨浜町
- ・時 期 令和4年9月7日（水）～9日（金）
- ・実施学年 第3学年（3学級21名） 引率教員11名
- ・日程概要
  - 1日目：学校（バス）⇒ネスタリゾート神戸⇒湯梨浜町（宿泊）
  - 2日目：鳥取砂丘⇒湯梨浜町（グラウンドゴルフ・ドラゴンカヌー）⇒湯梨浜町（宿泊）
  - 3日目：湯梨浜町⇒フォレストアドベンチャー（朝来市）⇒学校

# 自立に必要な力の育成をめざした 修学旅行

校長 今岡 由樹

学年主任 山田 圭太郎

## 大阪府 大阪市立弘済中学校分校

### ●学校紹介

平成二三（2011）年に、児童自立支援施設大阪府立阿武山学園に公教育が導入された。本校はこれを機に、吹田市にある児童養護施設、心理治療施設の併設校である大阪市立弘済中学校の分校として阿武山学園内に併設された。今年度で開設12年目を迎える学校である。

児童自立支援施設への入所に至った経緯は様々であるが、些細なことでのつまずきから大人不信、学校不信を抱えている子どもたちが多い。また、授業離脱や不登校になった子どもたちに学ぶことの楽しさ、わかることの嬉しさに気付かせることを教員の使命と捉え、この学校を学び直しに取り組み「教育の原点」との認識を全教員で共有して、様々な教育活動に取り組んでいる。



校舎外観

### School Data

- 【創立年】 平成23（2011）年
- 【所在地】 大阪府高槻市奈佐原956
- 【教育目標】 学力の向上と自立に必要な力の育成
- 【全校生徒数】 57名（令和4年11月末）
- 【教職員数】 28名

### 実施要項

- 旅行先 兵庫県三木市、朝来市 鳥取県湯梨浜町
- 時期 令和4（2022）年9月7日（水）～9月9日（金）2泊3日
- 参加生徒数 第3学年（3学級）21名
- 引率者 11名
- 日程概要

- |   |
|---|
| 【1日目】 学校（バス）－兵庫県三木市：ネスタリゾート神戸－鳥取県湯梨浜町（宿泊） |
| 【2日目】 鳥取砂丘散策（バス）－鳥取県湯梨浜町：体験活動－鳥取県湯梨浜町（宿泊） |
| 【3日目】 鳥取県湯梨浜町（バス）－兵庫県朝来市：体験活動－学校          |

## これまでの修学旅行

本校は児童自立支援施設の併設校として開設し、今年で12年目を迎える歴史の浅い学校である。在籍する生徒は少年審判を経て、児童自立支援施設に措置されてきた生徒が多い。施設への入所に至る経緯は様々であるが、本校の生徒は家庭や学校において楽しく行事などに参加できた経験が乏しい。

これまでの修学旅行の計画にあたってはこのような生徒の生活背景に寄り添い、体験活動に特化した内容で取り組んできた。「新幹線に乗った経験がない」「富士山を見たことがない」といった生徒が多い年は新幹線で静岡まで行き、富士山麓で自然を満喫する体験活動を行った。

当時はとにかく時間を忘れて、へとへとになるまで体を動かし、思いっきり楽しい時間を過ごす旅行だった。それゆえに、修学旅行が近くなると生徒の心理的ボルテージが高まりすぎて、通常日課をこなせなくなることが懸念されるため、修学旅行の日程、行き先や活動内容を直前まで伏せていた。そのため時間をかけて修学旅行の事前の取り組みをすることもできず、直前になって行程の説明と持ち物の確認をする程度に留まっていた。

引率については学校長、学級担任、保健主事の他に、施設の寮長が同行している。

### ●重点を置いた活動

先を見据えて考えて動き、  
生徒たちが自らの手で修学旅行を  
作り上げる！



## 修学旅行の 新しいかたちを探る

本年度は、本校の「学力の向上と自立に必要な力の育成」という学校教育目標を実現するための一つの取り組みとして、「修学旅行を自分たちの手づくりあげ、自分たちでやりきる」ことを目標に掲げ、全ての場面において、生徒が自主的に活動する内容を検討した。そのためには生徒へ丁寧な導入を行うことが必要と考えた。

具体的にはクラス単位での活動、寮単位での活動、班活動など、あらゆる活動場面を想定して、生徒21人全員に役割を持たせた。そして、各係の担当教員が事前学習において、それぞれの係の役割を説明し、生徒が自身の動き方をしっかりイメージできるように努めた。

## 目的地の選定にあたって

今回の鳥取方面は4年続けてとなるが、鳥取および山陰地方を訪れたことのない生徒が大半を占めていた。中には地図上で鳥取の位置さえわからない生徒も複数名存在した。

鳥取方面には鳥取砂丘に代表されるように、自然が造り上げた雄大な景色が存在し、例年多くの生徒の心に焼き付き、感動を与えてくれた。鳥取を舞台に、思う存分体を動かす体験型の修学旅行にすることとした。

## 活動内容

### 【事前学習】

生徒たちには、1学期終了間際に内容を伏せて、サプライズ形式で学年集会を開いた。「今回の学年集会は修学旅行についての話です！」と告げると生徒たちは一斉に目を輝かせ、話に聞き入っていた。まずは、今回の修学旅行の目的をしっかりと導入することから始め、自分たちが主体的に動くことの意義、ねらいをしっかりと理解させた。

後日、タブレット端末を用いて、行先である鳥取方面について調べ学習を行った。地元での人気スポーツや特産品などを調べていくにつれ、興味関心が高まっている様子が見られた。



出発式の様子

## 【出発式・帰校式】

学級代表委員を中心に、出発式をはじめ宿泊する旅館の入館式、退館式、帰校式の司会進行、代表挨拶を行わせた。成育歴からくる特性上、人前に立って話をする事を苦手とする生徒が多くいたが、練習を繰り返すことで当日は全員が堂々と話すことができた。

バスに乗降する際「お願いします」「ありがとうございます」の挨拶を繰り返すうちに、添乗員や運転手の方々に対する感謝の気持ちが芽生えた。そのため「帰校式では添乗員と運転手の方にもお礼を言いたいし、一言話してほしい」との子ども達からの要望があり、急遽帰校式の式次第を変更するといった場面もあった。運転手の方からは「この仕事を携わって35年経つが、『楽しかったです。ありがとうございました』との元氣な挨拶の声をこんなにも聞けたのはあまり覚えがない。とてもやりがいを感じた」とのお話をさせていただいた。

## 【美化活動】

宿泊する部屋ごとに美化係を設けた。活動場面の少ない係であったが、部屋の破損調査、退出時の清掃チェックなどを行わせた。美化係がゴミ袋を持って回り、ゴミを回収する姿が集団全体の美化意識を飛躍的に高めた。最終日の朝食時には自発的に「来た時よりも美しくして大阪に帰りましょう」との呼びかけが行われた。



鳥取砂丘で遊ぶ生徒の様子

## 【地元の方々と触れ合い】

今回の修学旅行では宿泊地である東伯郡湯梨浜町の観光協会をはじめ、グラウンドゴルフ協会、ドラゴンカヌー協会の方々に体験学習のお手伝いをしていただいた。グラウンドゴルフでは一つの班2〜3人の生徒に地元の方々がインストラクターとして1名付いて、アドバイスをいただきながらコースを回った。まるで孫と戯れるような優しい対応は生徒たちの心をほぐし、すぐに心地よいコミュニケーションが繰り返された。

ドラゴンカヌーの体験では、クラス対抗のレースを行い、生徒が力と息を合わせオールを漕いだ。勝ったクラスには湯梨浜町観光協会やドラゴンカヌー協会の方から地元ならではの景品をたくさんいただいた。

ドラゴンカヌー体験の閉校式で、事前学習にて使用した「修学旅行マップ」を観光協会の方に渡した。「こんなに調べてくれて、楽しんで



グラウンドゴルフの様子  
(地元のインストラクターが見ている様子)



ドラゴンカヌーをこぐ様子

みにして来てくれたことが嬉しい」とのお言葉ももらった。その後、修学旅行マップは湯梨浜町観光協会の事務所に掲示してもらっている。

本校では児童自立支援施設が持つ様々な事情により、学校の近隣地域の方々との交流を持つことができない。しかし、遠く離れた地で、自分たちの活動をサポートしてくださった方々との心温まる触れ合いは、生徒の心の成長につながるものであった。バスを見送ってくださった方々へ車内で「ありがとう!」との声とともに、元気に手を振る生徒たちの姿を見て、なにか幸せな気持ちになった。次年度以降は十分な時間を設けて、地域の方々との交流を含めた事前学習を計画してみたい。



【つながる力の向上について】

本校の修学旅行の名物といえば夜に行うレクリエーションである。屋内ではあるが、体を動かす取り組みや、クイズ大会などその年によって内容は異なる。何をやるにせよ、教職員も生徒も汗だくになって全力で楽しみ、卒業まで語り草となる珍解答や迷パフォーマンスが繰り広げられた。

今年の学年教員団では、どのようにレクリエーションを企画しようか会議を重ねた。生徒たちが「自主的に動く」ことだけではなく、心の成長につながる取り組みもなんとか盛り込んだかった。そこで、本校が取り組んでいる「つながる力向上プログラム」の二環であるアサーションとピアサポートの活動を、レクリエーションに取り入れることを計画した。アサーションとはお互いを尊重しながら自己表現をめざすコミュニケーションスキルのこと、ピアサポートとは当事者同士が支え合うことで、悩みや不安を共有できる仲間づくりのことである。

実際のレクリエーションで生徒たちは、身振り手振りだけではなく、どのような言葉を添えれば相手に上手く、気持ちよく伝わるかを考えて行う伝言ゲーム、3人1組で知恵を出し、助け合って取り組むクイズなどを行い、あつという間に1時間が過ぎた。終わってから切り替えが大切だとはわかっていても、いろんな場面を思い出しては笑いが止まらなかった。生徒同士が心を開いて、つながることができたことを確信した。

ちなみにこのレクリエーションのことを知っ



レクリエーションの様子



グラウンドゴルフ（ドラゴンカヌー）の表彰式の様子

た湯梨浜町観光協会の方々が宿に駆けつけてくださり、生徒たちに加わって一緒に楽しんでいただいた。思わぬところで地元の方々となることができた。

まとめ

厳しいルールの下で集団生活を送る本校の生徒たちにとって、これまでの修学旅行は経験したことのないことに挑戦し、思い出を作る機会、つまり「こ褒美」的な趣が強かった。今年度は初めて事前学習や、自主的な集団行動に取り組ませることに挑戦した。従前のやり方を変えることには常に賛否両論がある。生徒たちを率いる教員団にも不安はあった。しかし生徒たちは自分たちの手で修学旅行を作り上げ、やるべきこと、やれることをしっかりとやり遂げてくれた。

最終日の朝、退館式で生徒代表がお礼の言葉を述べた。これを受け旅館の責任者の方から身に余る言葉をいただいた。

「みなさんの元氣な挨拶、立ち振る舞いなどをみて感動した。おもてなしを仕事としている私たちが勉強させてもらった。ここでの経験、作った思い出を心の糧にして成長を続け、大人になっていつか大切な人を連れてまたここに来てほしい。みなさんの幸せを心から願っています。」

一言一言が私たちが優しく包み込んだ。この言葉に生徒たちも心を震わせた。

今年度からの新たな取り組みは、学校としても修学旅行の在り方や集団の動かし方など



生徒が班を率いる様子

に二石を投じる機会となり、「修学旅行を自分たちの手でつくりあげ、自分たちでやりきる」という目標を達成したことで、集団の大きな成長につながることができた。

たった3日間ではあったが、生徒たち一人ひとりが大きく成長したと感ずることができた。学校に戻り、口々に「楽しかった」との感想があふれたが、楽しいだけではなく、今後の進路選択、将来に向けた自立に必要な何かを体得してくれたと確信できる修学旅行となった。

最後に、この修学旅行の実施にあたり、協力していただいた各方面の皆様方、そして集団が持っている大きな可能性に気づかせてくれた生徒たちに感謝したい。